

今週の本棚



加藤 陽子 評 (東大教授・日本近代史)

帝国の計画とファシズム

ジャーニス・ミムラ著、安達まみ・高橋実紗子訳

(人文書院・4950円)

本日の紙面では複数の翻訳書が紹介されているはずだ。元が外国語で書かれた本は、読者の興味をひく序論の書き方から、論理展開を重視する段落構成に至るまで、邦語作品とはやや趣を異にするため敬遠されがちだとも聞く。

だが日本史関連の翻訳書でいえば、外からの目で大きく対象を捉え、通説を十分に押さえたうえで新視点を展開しているものが多い。お薦めなのだ。また、誰もが一度は疑問に思うような問いに、

説得的な答えをしつかり書き込んでいるので大局観を得やすい。今回ご紹介する本もこうした特徴を全て持っている。本書は19

精神力の動員 戦争導いた「技術官僚」

31年の満州事変から45年の敗戦までの時期、権力の中核を占めた政治集団としてのテクノロジューロクラット(技術官僚)を描いた。この時期の歴史を知るようになる。総力戦に不可欠の石油や鉄鋼

等の資源に乏しかった日本が、なぜ世界の超大国を相手に戦争を始めたのかといった問いが浮かぶようになる。このような疑問に、著者は次のように答えている。

明治日本の物語に外せないスロガンの一つに「富国強兵」がある。このテーゼは実のところ、軍事力万能を謳うものではなく、近代化に成功した証を西欧列強に見せるため、日清・日露戦争の勝利を狙いにゆく明治日本の政治力を意味するものだった。このような富国強兵の含意を、昭和戦中期にあって再定義し、変えていった主

いたことに要因を求める。

著者が技術官僚と名付けた彼らは、全面戦争を前にして国力の定義を変え、国民の説得に取りかかった。経済力は国力の一要素に過ぎず、人間の労働力と精神力を最大限に動員すれば、物資の量や資金力の差などはどうにでもなると説いた。今も昔も、政治家が選挙の折などに、国力や国策について演説するのは普通の光景だ。だが、高級官僚が自らのラジオ番組を持ち、そこで国力や国策を熱く論ずることは現代では想像しにくい。これが昭和戦中期に実

体こそが、商工省の岸信介、内閣情報局の奥村喜和男、大蔵省の毛里英於(たけもと)らの高級官僚グループに他ならなかった。外国と日本の関係を位置づける世界観の意味内容が、彼らによって書き換えられて

際に起こっていたことだった。本書は戦時日本において、国策の企画立案者として登場したテクノロジューロクラットがなぜ権力を掌握できたのかも明らかにする。関東軍や支那派遣軍などの出

先が軍事力で叩き出した傀儡国家・政権の統治機構に参入し、その政治・経済を運営したのが彼ら技術官僚だった。資源の欠乏を克服するため、テクノロジューと国民精神を接合させるファシズムの発想に学んだ技術官僚らが、軍部・財界・汎アジア主義者をつなぐ環の役割を果たし、多数派を形成していったとの理解である。

本書の独創性はここにある。かつて丸山眞男はファシズムの政治的機能を分析し、20世紀における反革命の最も戦闘的な形態だと定義した。対して著者は、戦時日本の経済的実態や政治制度の分析に注力し、技術官僚の理念や戦略を解明した。ファシズムの本質と機能を問題とせず実態と制度を一点突破で描いたのは見事だ。

本書は技術官僚がいかに権力を掌握したかを描いた。では、なぜ国民は彼らを歓呼で迎えたのか、それを共に考えていきたい。